



葉
通
儘

15
67
1



筆の修序



子長身不遊江淮上會沈指探
 禹穴窺九疑然後有史之作
 彼雪似梅是言如梅只是風
 土異則人情亦不均廣見聞通

門 5
第 67
卷 1

人情遊行亦為无益矣。人感別
會基所古入旅遊之乃乃著
作也。白鳥結髮山林之徒或步
越乎東關却經行手達關即為
有毛之雲水。是古志白鳥的

之名山石室。積其石闕者。必
烏遊干余。門固畫洛。每之務
而其病屬憶。韞魚膾之故。果
所行此亦其性已矣。之河竹林
氏殊遇之。相愛之信哉。林氏白

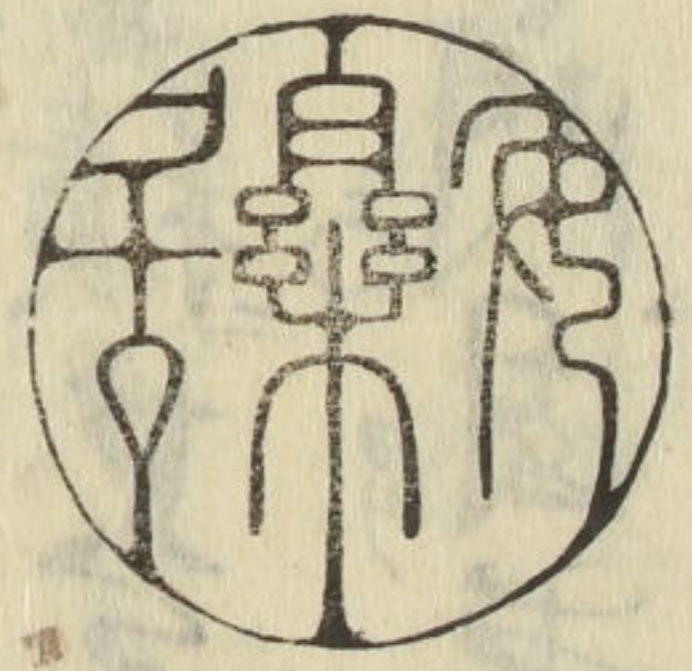
夏平

二三

鳥彈寇之寵奉得斯人

安永二年秋九月

新井白子



筆迹修卷之一

目錄

- 長間乃隆付夜啼石
- 大峯隆掛付為我兄弟墓
- 每菱石枕之平松
- 仲養天皇在神功皇后陵
- 奥沢柳金鉄好壺

- 春備大臣母の廟所花東大寺瓦
- 伊豆國修善寺什物
- 狼人を怖と付文合
- 野乃くは久き付考鳥印を割
- 宮守虫喰物運ぶ
- 扇を袖く發公

等々の傳書之一

○春備大臣母の廟所花東大寺瓦
 日と里れ老多此山登り南國此二十一所者廿二夜又
 ありり初基の作此親世音菩薩を安置して奇号と親音
 奇と此堂より一町餘登り社あり延喜式神名帳より出り
 栗田社神社といふと是なりと古老の物語りなりき
 栗田嶽といふ少きゆふあり嶽といふ帯ありながら小村
 ありありた孤流りてのちとん此山少い信法甲斐れとく
 隣人たき時、南此界るとは國中より其甚るく布引乃

の系より登る事教十町山乃八分目より松拍生ありて縁
多くある中よのちして老し雨分結く悪たたくま
た女く集積乃男女喝分凌ぐ彼種を埋めたる強とそ
ふの頂又岩石ニツ三ツあり昔借よ本れ系乃分ぬきた本
乃根岩角よ名はと登る事書より又町をより探の枝を
伐く逢るよじし竹まば種分はとあるふ月トとそ集積
れ日ハ較多探分とじ最末最積を府あして人と然しむ
余じう日本麻子とるふもの分見たりしと西國の
名産名石神社乃由来名分著し此種れ事と書
て撰者の抄分ふつとこれ代よりありん位傍法印

はくぐかりつらく善根を教し迷ひれ雲とよらひ
て衆生よ善念分勤の功德分多し欲分起して地
獄の縁分ある此種のあふゆかりしと井れ内埋
むとやんともあるべき事かり彼撰若くえ縁乃は余
が父兄所著れ因の分以て用板の書本武より玉
来とそ書後大分れあふ多てたしふいそ人と
又佐夜れ中ふ夜帰乃石といふをやらやし一守保
乃中はよりれ事かり其始め佐夜れ中ふ久延す
よとそれ最本れ松よ古本ありしを去俗疾るた乃
松よ傳るる中記も久より彼孕女と殺害也了

然なりと入り享保乃中比雷墜て此松枯らり其
をこわたり又丸るものかむりより往來其
あり情ふ又事仕社に加茂古的祀約よし此中
れうらむらうし又之は此不社中れ神なるれ
各丸乃其社地孤神一智一何は候りあふま
中し又強し最うりと之より去りて何とら
もよく不れ形するをぬくまをよまるとの
うらむらうと疾啼れ松枯ら後此不疾なるれ
揃て後後理よも候り書下しよりいよく世と
啼乃名るし又昔より云傳へし此不土中
候

く堀出えんとし必用るれ又起る大地乃
けむらうやんとし雨乃たびくろとなく
あらびぬんとしをくりとを室暦九年夏
奥及より順礼日者教十人あり提ある
刻多きばらんやうとらびおしを全論より
石瓜我うがかりと刻起したうとて
その後えり又おありて今い自由と
るり我道と石の居やむりとい方角遠
とも何乃崇もよく又字は名号も其
と疾啼れと云其介及女を殺害し又
葉川

源治乃先祖とてさぬく此俗流ありとも執りて
ぬきたるなりをこと世よえ松よりするは瓜藤のまじ
をき返回乃鐘金鐘の涌出るとい絶すて歎かば
のゝをちややするがらん

按て昔も長年中よりつあへ乃百姓兩人金銀とい
なるものも掃たりて寺院とても回舎の鐘と鐘と撞
をさる事もかたは此寺適く鐘ありてきたるは瓜藤
五三里乃る人思童怪しく此音の何ぞと
父母の死もさへいふも今やとて事もかたは鐘と
いふものといふをなましく死字まじりて五三乃鐘

ともかたはぬらん
又金銀銅鉄磁鐘も皆の縁と割られは此音は
笑たびくよう縁といふはかたはく響くも乃と
さふより鐘も同じくゆ縁をさへあ乃響くと
ま金鐘乃涌出るといふてつとなく響きよ
かたはるも思童れ云からる事なり
又鐘を井の中へ埋たりとてをといは彼處石に又
小石瓜藤のまじりて瓜藤のまじりて瓜藤のまじり
と人瓜藤のまじりて瓜藤のまじりて瓜藤のまじり
井の底といふも處流からん其石より二町も下は地獄

穴といふあり大なる黒石敷きまきまあり穴と名づくを
之の眼くは風ありて冷くと名づく入る甚か持要一か
くはくはちまきまあり乃涌出る様なり井の来い決て處
夏秋暖氣乃時流るる極甚なり一埵地獄といふ極
寒の時流るる用きかたなる事なりやとあり一此山に限
らず積乃任しといふ極あり積の盡しり生るゆかり
又寺此朝に任一尺六七寸乃古に積あり路に永和二年
丙辰三月淡松名宇布長長室寺とあり宇布長
といふ此山より十に五里西今切の海乃入りなり長室
寺といふ寺今に臣偶田細の字にありは極く久しき

幸からんといふ布長此人乃信り信り此山にありは横
津園頂摩寺とあり積なりと名づく此山の付を造り持事
を此寺に積なりといふと人安に寺附りありはらん
此山間より二里むろ西にありて安里山長後にも
積あり人皇六十九代後朱雀帝長曆元丁丑夏に
伏奉りて積乃任信信修儀と其夜空中にひかり
きてつづくともなく去大霧と名づくありは一此山
場積樹といふ此山の木乃枝に樹ありし高きと名
其後天竺七年六月二日遠に園佐野郡系田郷
安里山長後寺とあり

後深草院の御宇宝治二乃以工後信濃守祐光
國公領を長祿寺の昂善提所なり吾我足るは塚有
款方乃工後家の善提所より足る乃塚ありゆ人を
とも知る人なり

○按津國須磨寺よ女堂なる法ありて人徒見知りたる
花乃制札かり三河國長橋をき大平川の邊に
院と云る禪寺あり此所は世より後後極願入るは地
て冷泉女が田基乃寺なり其代の古と画像とあり
中よ女堂なる経一紙場と云乃文通あり彼須磨寺
乃花の制札日名より之なる地とも佐く本橋系宇治

川乃事又本名系仲粟津と対花の事とあり
又言漢がたれ而回あり元暦元年正月二日の
本名対花れまよかくれしとの文漢つぬり相
勝越の寺よありも皆名強よく似たり其傳いり人
のふよありんともや
又三河國和地村神雙山醫後寺よ古代の大縣若
徑乃疎りる敷十卷あり其毎よとましくは名若の
名公記しあり中よ佐系是のとあり本名系仲の
物書を支坊是のとあり
○須磨寺をたふふと云ふは仲兼天皇此陵あり

ありと池あり陵よとまは壺多くあり経口とまき尺
たくり一回経る瓜あけとよ二初めあり其かありとあ
て凡に八百とあらんが土俗のつらひまゝ人乃后に瓜供
下し然り友と陵といふと又壺と云わりと茶店乃
焼の治かり又神功皇后に陵をたふらるより西二十町
まの教姫と云ふありて其例も二ま入経の恒壺といふ物あり
大換一回に方よ一ツ経の割とて地よ埋とありとよや
古代葬の瓶を用ふる事ありや日一沙代乃陵と團
兩の習道ととも壺のあり瓜とる古例あり事あり
奥に柳倉よかゝる壺とらふ物あり高館娘に頼と去申よ

砂瓜包と燃て去蒸れと一瓜あけて申乃とよと
そろくゆせば瓜おる其伝未去ゆら甚し
武家此婦女孩卵瓜給るゆと去俗あるは不とふ
かりとと大乙給頼とも高館娘とといふと代
碓氷天皇之内裏に頼を書りてとよとよの瀧
よ用いたすゆと柳倉乃人のまきつら其後か乃
かまはが徳林寺の境内よありて郡の号と金壺
ふと頼と武家孫娘の袋よ用ふるやと信山なる物
よとありとと笑りを世に伝寺と三河出生乃信と
と親父笑しるる人あり

○享保十三戊申和瓦字知郡大沢村の農家より包
 に入并瓦一壺一ツ瓦十二枚堀出とて申上を扱
 文字は取付多分入くあり瓦厚二寸八分巾一尺
 七寸長を尺九寸其文は從五位と右衛士督兼納
 中宮亮下道真備葬亡妣揚貴氏墓天平十
 年八月二日記歲次己卯とあざやう小又もつと
 かや吉徳大后母堂の麻布なりよし
 貞享三丙寅八月三河國保原郡勝北ふるよ初迄と
 云あり農夫畑畦乃堀ふきを初瓦を堀出とて經七寸をあり
 申上七曜の輪あり申上りれ三ツ東大寺右上方

二ツ大佛丸の二ツ風瓦を勢九から古
 首末大寺草創の耐瓦と造りあるあり之を畑
 のを造殺多瓦乃破たるあり今もわく堀出と
 申上神龜二年二月と取付る瓦これ割符と云之
 て瓦乃裏面は南北字ありひる東乃字あり取付る間
 ありてに方へ執去然くともけ文字蘇わりの掃りしと
 破付る胡のそん越戸村渡舎西ちる詳信蘇孫と
 して今もありを法智寺とわたりてよりわく堀出の
 序をりてりて瓦ありあり
 又信蘇そたは号と
 ありて見たり

ふろし
驚し
まうと
室よ
出と



修夏園維若寺と弘法大師開基此寺也今ハ神宗之
 堂宇方代此中一と甚古あはしく前より川ありとのふ飛
 きて向のら際よまう其あよ苦りなる碑も源頼朝に
 寄して生害ありと云々即其廟也余壯多し寺此相向
 二園ありて室よ格ふる目あり什物較多の中ハ尼將軍寺
 附の法華經あり表題紐紙金泥なり古代め板石を
 今れ平刺を押ごく一字マ押ふるりの友約ゆ
 といふ了る古緯や教の然かりを油よ征夷大將
 軍左金吾督源頼家為菩提尼置之と自筆
 疑ひかたりのかり又尼將軍一宋朝より懸るは系

三幅對乃西あり中央に釋迦左右に文殊普賢横巾
に尺餘堅長九尺をかりと云ふるに画にありと
繪地に繪物なりとのちり普賢の系たる象甚不
合なりといふ處画に繪物なりと云ふればかく
不形ならんと云ふところに見しやうと云ふ
は其後享保十に丁酉象狐東武へ執り一時
繪くると終焉寺にありぬの象實は生寫したる
筆を始めくさひありけり是れなりと云ふるに日本
に見ゆけり矣物草木會款画にこれかくと云ふ
乃粉後より全体と云ふところならんは後見女

乃おぼむりのも彼象生れしなりしがを筆の
画にたるなりと云ふく少く遠くあるあり此と
よに又十年もと云ふに又えれと云ふ鼻のなれた年と
ならんと云ふるなり
狼の画に寫しても筆にたれどし云ふれども疾疫
眼の光る筆の墨にぞくはれ切込身よを一啼
も本よ筆しと云ふに又云く怖れと云ふ保乃末より
大に痛出来と云ふ人を備よ毒と云ふけりて人後
と云ふ乃と云く狂ひなりて死亡と云ふ河をわたり
へ狼と云ふ此病と云くおとく人と云ふ怖るべし

鴉始鳴反舌無聲

鴉伯勞也是月陰作於下陽發於上伯勞夏至後應陸而殺蛇磔之於棘而鳴於上

歌書之語乃くさくたとの事あり性やれ虫と執て垣へ本の細を枝よこして最其の鳥よ反哺也二枝乃れつるれとの尾と隔て居るも自然ふ志く此も黙の智急いあらざると人あり去るう智急がたとむうぬらうう次田舎者よありく恥らうぬ幸救多あり善れ鳥よ産卵必造て同居し又鳥乃巢れを必鳩の巢より善鳥の事よ諸鳥れ巢を披して害成るとよをたよ

其碑がたの未家と事よあひて里れ童いたづね多きは善も鳥も常後くして卯の壳と破れり之を雛と庇はけ殺し人よ善の産と産ひて貝破の鳥雛は産と鳥と鳩の子を捕はゆるやと後産の帰るしと居るくはゆるすし又此よ志るす

宝曆十二年れ善きに金吾乃驛横ふ某が居る壁は雨除の板あり又多し高麗産口しすしはまは板より折換しるもこの星は取人ゆる射は先年け多りと刀之と信よふまも会志中と射よこし色

と其^{その}疾^{やまひ}を愈^{なす}てくるくま^まるむらう^うを^を逐^おる^くこと
か^かく^くど^ど大^{おほ}ふと^と不^ふ思^し後^ごよ^よあ^あひ^ひを^をま^ます^す人^{ひと}く^くよ^よ知^しる^る也^{なり}
た^たま^まが^が病^{びやう}し^しき^きま^まが^がう^うと^と大^{おほ}勢^{せい}集^{あつ}り^り是^{こゝ}に^にあ^ある^る
さ^さる^るも^もサ^サ又^{また}年^{とし}に^に月^{げつ}日^{にち}何^{なに}と^とて^てう^うか^かく^く生^なま^まる^る
ぬ^ぬらん^{らん}と^とさ^さく^く及^{およ}び^びは^は壁^{かべ}に^にあ^ある^るも^もあ^あら^らじ^じ
く^く一^{ひと}筋^{すぢ}又^{また}流^{なが}る^る此^{こゝ}に^に雄^{ゆう}叔^{しやく}年^{とし}に^に回^{まわ}り^り吟^{ぎん}め^めを^を運^こぶ^ぶ
吟^{ぎん}也^{なり}た^たら^らる^る之^のう^うら^らし^し

○三河國足助村の百姓之者^よの者^{もの}村^{むら}の者^{もの}討^うつ^つと^とぬ^ぬ
裏^{うら}に^に病^{びやう}又^{また}を^を兼^{かね}を^を病^{びやう}く^く毎^{まい}日^{にち}足^{あし}に^に病^{びやう}あ^ある^る日^{にち}も^も
用^{もち}あ^あつ^つて^て弓^{ゆみ}矢^やも^もか^かと^と其^{その}病^{びやう}を^を愈^なす^すと^とあ^ある^る病^{びやう}を^を愈^なす^す也^{なり}

と^とい^いふ^ふ石^{いし}は^はい^いひ^ひに^に産^うま^まる^る何^{なに}ん^んと^とく^くよ^より^り引^ひて^てま^まる^る
神^{かみ}と^とい^いふ^ふ裏^{うら}に^にれ^れ家^{いえ}より^{より}外^{そと}面^{めん}へ^へ露^{つゆ}を^をし^しる^る大^{おほ}く^くも^もあ^ある^る
病^{びやう}又^{また}其^{その}疾^{やまひ}遠^{とほ}く^くを^をき^き回^{まわ}り^り睡^{すい}に^にあ^ある^る病^{びやう}又^{また}中^{ちゆう}で^で怪^{あや}し^し
乃^{すなは}ち^ちも^も病^{びやう}を^を持^もち^ちて^て人^{ひと}と^と遠^{とほ}く^く居^いて^て呵^あま^ませ^せん^んと^とせ^せし^し
大^{おほ}く^くも^も獲^とり^りあ^ある^るが^がその^{その}病^{びやう}を^を治^なす^すと^とあ^ある^る病^{びやう}を^を治^なす^す也^{なり}
と^と集^{あつ}り^り病^{びやう}を^を治^なす^すと^とあ^ある^る病^{びやう}を^を治^なす^す也^{なり}
年^{とし}を^を治^なす^すと^とあ^ある^る病^{びやう}を^を治^なす^す也^{なり}
病^{びやう}を^を治^なす^すと^とあ^ある^る病^{びやう}を^を治^なす^す也^{なり}
又^{また}疾^{やまひ}を^を治^なす^すと^とあ^ある^る病^{びやう}を^を治^なす^す也^{なり}
と^とあ^ある^る病^{びやう}を^を治^なす^す也^{なり}

霞

